令和5年度　学校関係者評価

旭市立矢指小学校

1　学校教育目標

「 健康で、豊かな心と自ら学ぶ意欲をもった児童の育成 」

2　本年度の重点化された具体的な目標

① だれもが尊重される潤いのある学校づくりに努める
② ふるさと旭に誇りをもち、社会に視野を広める子どもの育成を目指す
③ 確かな学力と学び続ける姿勢を育む
④ 一人一人の教育的ニーズに対応した特別支援教育を進める
⑤ 豊かな人間性と思いやりの心を育む
⑥ 健やかな体と様々な危険に適切に対処できる知識や行動力を育む
⑦ 地域とともに歩む学校づくりを進める
⑧ 信頼される教職員を目指す

学校関係者評価委員
（学校運営協議会委員）

〇学識経験者
〇地域コーディネーター
〇矢指地区区長会長
〇矢指地区社会福祉協議会長
〇元主任児童員
〇PTA代表

3　自己評価結果に対する学校関係者の評価・意見等

学校による自己評価の評価基準　：A(満足できる：肯定的評価90％以上)、 B（ほぼ満足できる：肯定的評価70～89％）
C（やや努力が必要である：肯定的評価50～69％）、D（努力が必要である：49％以下）

学校関係者評価の評価基準　：A(適切な評価である)、B（ほぼ適切な評価である）、C（やや不適切な評価である）、D（不適切な評価である）

分野・領域	評　価　項　目	評価の指標(%)	自己評価		考察と改善に向けた取組	学校関係者評価 自己評価の適切さ	学校関係者評価 改善に向けた取組の適切さ
学校運営 教育課程	保：子どもは、楽しく学校に行っている。	94.9	A	A	肯定的評価は高いものの、全ての児童が学校生活に満足しているわけではないことが伺える。一人一人の悩みや不満に寄り添い、できれば全ての児童及び保護者が「学校は楽しいところ」と認識していただけるよう努力することが学校の責務だと考える。今後も児童理解に努めていきたい。 学校行事については、コロナ禍における制限の緩和が進み、コロナ禍前と近い形で行事を行うことができたことで高評価につながったと考えられる。今後も児童にとって価値ある学びを積み重ねられるよう努力していきたい。	A	A
	児：学校はたのしい。	93.2	A				
	職：子どもは、楽しく学校に行っている。	100	A				
	保：学校の行事は楽しく充実している。	100	A				
	児：学校の行事は楽しい。	91.4	A				
	職：学校の行事は楽しく充実している。	100	A				
学校関係者による意見等	・「学校が楽しいところ」だと、全ての児童が実感できるような取組を今後も期待しています。 ・基本は子どもが「学校が楽しいところ」と思えること。これだけの高評価指標なら良いのでは。 ・自己評価・改善に向けた取組の適切さ共にA評価は素晴らしいと思います。ひとつ欲を言わせてもらえば、学校行事の楽しさに対する児童の感じ方で四段階の一番上を選んだ児童が68.1％であることです。この数値から児童がもっと楽しめる余地があることの含みを感じます。学校側の一層の工夫を期待します。						
学習指導	保：子どもは授業が楽しく、わかりやすいと言っている。	95	A	B	学校の授業については、ICT機器の活用も含め教職員もよく努力し、児童に「わかる授業」「楽しい授業」を提供できるよう努めてきた。保護者や児童の肯定的評価も高い数値となっているので、今後も教職員の指導力向上を目指して努力を積み重ねていきたい。 家庭学習の習慣化については、まだA評価とは言えないが、保護者の肯定的評価は昨年度末より12．4％向上している。「家庭学習の手引き」を配付・説明し、家庭学習について学校と家庭が同じ視点に立って取り組めたことにより少しずつ効果が表れているのではないかと考えている。今後も継続していきたいと思う。 読書については、今年度から調査を開始した。保護者の肯定的評価は低いが、児童は7月のアンケート結果より＋11％と向上している。規定の冊数を読むともらえる「読書賞」を1年間に最低1枚はもらえるように学級単位で呼びかけをし、12月の段階で80％以上の児童が達成することができた。読書に対する意識は確実に高まっていると思われるので、これを家庭にも広げられるよう今後も努力をしていきたい。	B	A
	児：授業が楽しい。	94.8	A				
	職：子どもは授業がわかりやすく、楽しく学べている。	100	A				
	保：子どもは家庭学習の習慣がついている。	82.3	B				
	児：家でも学習をきちんとしている。	82.8	B				
	職：子どもは家庭学習の習慣がついている。	92.8	A				
	保：子どもは読書の習慣が身についている。	69.6	C				
	児：読書の習慣が身についている。	81	B				
	職：子どもは読書の習慣が身についている。	100	A				
	保：学校は学力向上のために熱心な取組をしている。	98.7	A				
	児：学校は学力向上のために取り組んでいる。	98.3	A				
	職：学校は学力向上のために熱心な取組をしている。	100	A				
	保：学校はICT機器を活用している。	96.1	A				
	児：学校はICT機器を活用している。	94	A				
	職：学校はICT機器を活用している。	100	A				
学校関係者による意見等	・保護者の評価が低い部分は、学校のみではなく家庭での取組も大切だと思います。引き続き保護者にも協力を求め、共に良い評価になるよう取り組んでいただければと思います。 ・今後も「授業で勝負」できる教師を目指し、研鑽を積んで欲しいと思います。 ・学習指導における教師の自己評価がほぼAであるのに対し、家庭学習の習慣・読書の習慣における保護者・児童委双方のB評価が気になるところです。学校側として今一度吟味する必要があるのではないでしょうか。在校中の学校側の対応があっても、自宅での読書習慣をC評価とする保護者が多いことは、「読書習慣なるものへの保護者の認識不足」に起因するのではないでしょうか。この点の改善が必要です。						
生徒指導	保：子どもは正しい言葉遣いやあいさつができている。	83.6	B	B	児童主体による「あいさつ運動」が定期的に行われた結果、児童のあいさつが良くなってきたのを感じている。児童の肯定的評価は昨年度末90．7％、今年度は83．6％で下がっているが、児童に話を聞いてみると「あいさつ運動があって、今までできていなかったのにできていると思い込んでいたのがわかった」という趣旨の話がでてきている。あいさつ運動が自分を客観的に評価する指標となっていることがわかった。今後もただ「あいさつをしっかりしましょう」と呼びかけるだけでなく、児童自身がそのことに関心を持つような手立てを講じていくことが大切だと考える。 新しく家庭内でのコミュニケーションについて調査をした。肯定的評価は高いもののそうでない児童の存在が気にかかる。気配り目配りを忘れず、少しの変化も見逃さないようにしていきたい。 教師による「児童理解」の質問項目は、保護者の肯定的評価が昨年度末の82．6％から93．6％と11％向上している。昨年度の反省をもとに各教職員がしっかり児童と向き合った結果だと感じている。今後も継続できるように努めていきたい。	A	A
	児：正しい言葉づかいやあいさつができる。	86.2	B				
	職：子どもは正しい言葉遣いやあいさつができている。	71.4	B				
	保：子どもは早寝、早起き、朝ごはんの習慣が身についている。	78.5	B				
	児：早寝、早起き、朝ごはんの習慣が身についている。	85.3	B				
	職：子どもは早寝、早起き、朝ごはんの習慣が身についている。	92.8	A				
	保：学校は子どもをよく理解し、適切に対応している。	93.6	A				
	児：学校（先生）はみんなのことをよくわかっている。	94.9	A				
	職：子どもをよく理解し、適切に対応している。	100	A				
	保：家庭では子どもと十分にコミュニケーションが図れている。	92.4	A				
	児：家の人十分に話ができている。	93.1	A				
	職：保護者と児童は十分なコミュニケーションがとれている。	100	A				
学校関係者による意見等	・家庭生活の中で「挨拶の実践状況」を調査し、改善に結びつけられたらよいと思います。 ・家庭内でのコミュニケーション調査において、考察に記載される「肯定的評価は高いものの、層でない児童の存在が気にかかる」については、『家庭それぞれの意識の違い』故に如何ともし難いものですね「気配りを忘れず、少しの変化も見逃さないようにする」ことは、まさに『学校と家庭との最良のコミュニケーション』になることでしょう。						
道徳 人権教育	保：学校はいじめのない学級作りに取り組んでいる。	98.7	A	A	どの項目についても肯定的評価が昨年度末より向上した。教職員には人権意識をもって児童・保護者と接するように伝え、特に児童の呼び捨てについては厳しく指導してきた。普段から意識することで不適切な言動と捉えられる発言がなくなってきたように感じる。また、定期的なアンケートを実施し、ささいなことでも面談を行うようにしてきたため、悩みやトラブルの芽、担任に対する不信感等がすぐに解消できるようになった。 しかし、肯定的評価が100％ではないので、まだまだ見落としている案件があると考えられる。今後も児童理解に努めていきたい。	A	A
	児：先生はいじめのない学級作りに取り組んでいる。	97.4	A				
	職：いじめのない学級づくりに取り組んでいる。	100	A				
	保：学校は保護者や子どもの相談に対し、適切に対応している。	93.6	A				
	児：先生は相談にのってくれる。	95.7	A				
	職：保護者や子どもの相談に対し、適切に対応している。	100	A				
学校関係者による意見等	・『いじめのない学級づくりに取り組んでいる』において、保護者のA評価（四段階評価の一番上）48.1％が気になるところです。否定的回答も児童・保護者にありますし、見逃しがあることは免れないと思われます。最大限のアンテナを張り、対処していただきたいと思います。 ・『児童の相談への適切な対応』は、まさに前述の対応策になるものですね。具体的な施策を立てて臨んで欲しいと思います。						
保健・体育 安全管理	保：学校は体力向上に向けて積極的に取り組んでいる。	97.4	A	A	新型コロナウイルスル感染症による制限が撤廃されたことにより、体育等もコロナ禍前と同じように行うことができるようになったことが、体力向上に関する質問項目の評価向上につながったと考える。児童の体力については、コロナ禍の影響から若干落ちているように感じる。体力調査でわかった持久力や投力などについては、次年度の課題として計画的に取り組んでいきたい。 「学校は登下校や校内生活の安全に十分対応している」という質問項目に対して、昨年度は保護者の肯定的評価が83．5％だったのに対し、今年度は98．7％と非常に高くなっている。これは、学校で発生した怪我について確実に保護者に伝え、学校の取組をしっかり伝えることで信頼を得ることができたことが良かったのではないかと考える。校内外の事故はこれからも起こるであろう。まずはしっかりとした予防策を講じ、いざ起きたときは適切に対応すると共に保護者への説明責任を果たすことで信頼を勝ち得ていきたいと思う。	A	A
	児：先生はみんなの体力がつくように取り組んでいる。	97.5	A				
	職：体力向上に向けて積極的に取り組んでいる。	100	A				
	保：学校は健康管理に十分取り組んでいる。	93.7	A				
	児：先生はみんなが健康でいられるように取り組んでいる。	98.3	A				
	職：学校は健康管理に十分取り組んでいる。	100	A				
	保：学校は登下校や校内生活の安全に十分対応している。	98.7	A				
	児：学校は安全だと思う。	97.4	A				
	職：登下校や校内生活の安全に十分取り組んでいる。	100	A				
学校関係者による意見等	・『学校は登下校や校内生活の安全に十分対応している」という点での保護者の評価が、昨年度の83.5%から98.7%に向上した要因を「学校で発生した怪我について、確実に保護者に伝え、学校の取組をしっかり伝えることで信頼を得た」としているが、保護者側の否定的な回答が発生していること事態が問題です。厳しい指摘だとは思いますが、保護者への報告義務は事の大小にかかわらず学校側にあり、報告漏れがあってはならないことだと思います。事故への予防策を講じても対象が児童故、事故の発生は免れません。「いざ起きたときに適切に対応すること」、まさにその通りだと思います。						
保護者・ 地域との 関わり	保：学校便りや学年便り等で教育活動をわかりやすく伝えている。	98.7	A	A	昨年末からスタートした「tetoru（保護者連絡サービス）」が定着し、様々な連絡を遅滞なく送ることができるようになり、それが保護者からの高評価につながっていると考えている。また、地域学校協働活動も定着し、「できる人が、できる時に、できるだけ」という精神で学校支援に関わっていたいただくことにより、学校と家庭の距離が少し縮まったとも感じている。これらの要因から高い肯定的評価を得られたと考えている。今後も保護者の声に耳を傾け、また、学区会議等を通して地域の声にも耳を傾け、学校としてできることを模索していきたい。	A	A
	職：学校便りや学年便り等で教育活動をわかりやすく伝えている。	100	A				
	保：学校は家庭や地域と協力して活動している。	97.4	A				
	職：学校は家庭や地域と協力して活動している。	100	A				
学校関係者による意見等	・全体的に教職員の努力が伺えます。今後も子どもたちに寄り添った学校運営を希望します。 ・学校側からの適切な発信や地域学校協働活動の定着を大変嬉しく思っております。 ・「tetoruの活用・地域学校協働活動とのコラボにより、学校と家庭の敷居が低くなった」との評価発言があったが、双方ともまだまだ未熟の域を脱していないと思われます。「tetoru」においては通信手段の更なる進歩が臨まれるし、「地域学校協働活動」においては、「組織力の低さ」「行政の位置づけの不透明さ」等で今後に「あまりある課題」を残しております。「大人が用意しすぎず、先回りをせず、本物と出会えるようにフォローすることで子どもの本気（わくわく感）をどう高められるか」ということを目標として、学校・保護者・地域がそれこそ協働し合っていきたいと願わずにいられません。						